

玄遠俳句

和8年

2月号

冬 日

早村 春鶴

冬の景

山内都代子

冬日さすこのバス停の立話

北国の正月待つ子二人のみ

元旦やいつもの道を寺詣

新年の挨拶宮司長々と

今年もまた浪速で過ごす寒の入

襟巻のセンスは娘父笑顔
冬の日の図書館回り人まばら
串刺しの銀杏三つおでん種

ガラス拭き脚立登りて冬の空

日向ぼこめくるページのサスペンス

※大根焚……だいこだき。十二月九・十日
の両日。京都の了徳寺の行事。
※銀杏……ぎんなん、銀杏の実のこと。
※おでん……関東焚きとも言う。

※御柱……おんばしら、諏訪大社に立て
てあり、山下りが有名。

年 の瀬

山本 春英

諏訪の旅

坂井 白萩

立冬の門開け放ち児等を待つ

年の瀬やせかせか歩く人多し

大根の半分買つても手にあまる

大根焚食べごたへあり満腹に

緑なす大根の葉や天仰ぐ

来年の幸祈る冬の石仏
御柱見上げし先は冬の空

境内の焚火奥に見る昔日

水鳥の音ふり向く一人旅

足湯して眺むる湖面冬うらら

